

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007 年度～2009 年度
 課題番号：19520571
 研究課題名（和文） 播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究
 研究課題名（英文） The Restoration Study on the Community in ancient Japan
 by *HARIMANOKUNI-FUDOKI*, the olden topography
 研究代表者
 坂江 渉 (SAKAE WATARU)
 神戸大学・大学院人文学研究科・学術推進研究員
 研究者番号：00221995

研究成果の概要（和文）：

3 年間の研究を通じて、(1)『播磨国風土記』所載の地名の新しい現地比定と景観復元、(2) 国文学的研究の成果の吸収と課題の明確化、(3) 地名起源説話に引用される神話・伝承にもとづく民間儀礼や祭祀分析への接近、(4) 地名起源説話にもとづく古代播磨政治史へのアプローチ、(5) 地域連携の成果にもとづく新しい文字資料の発見、という 5 つの研究成果を得た。

研究成果の概要（英文）：

We achieved the following results through the surveillance study on three years. : 1) Local presumption of name of a place and Restoration of spectacle in *HARIMANOKUNI-FUDOKI* 2) Absorption of result from Research of Japanese sentence study and Clarification of its problem, 3) Approach of local festa to restoration by the Research of Legend and myth of name of a place origin in *HARIMANOKUNI-FUDOKI*, 4) Clarification of political history by the Research of Legend and myth of name of a place origin in *HARIMANOKUNI-FUDOKI*, 5) Discovery of ancient character material by the Result of Cooperation with staff of municipality.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2007 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2008 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：播磨国風土記、地名説話、現地比定、景観復元、神話、共同体、秦益人

1. 研究開始当初の背景

かつて戸籍・計帳の綿密な史料調査、考古学の発掘成果にもとづく集落遺跡研究などにより、古代地域社会研究は大きく進展し、活発な議論がされてきた。しかし 1990 年代以降、一部を除き、研究そのものは停滞的に

なった。新たな分析視角による研究も、ほとんど試みられていない。全体として、古代地域社会に対する研究者の問題関心は希薄になっているといえる。

その中で、現存する古代風土記の史料群についても、個別の自治体史編纂事業などで、

史料中の郷名・里名の現地比定や氏族分布研究などは、ある程度おこなわれてきた。しかし歴史学の立場から、風土記の地名説話の中身そのものにまで踏み込んだ総合的な村落研究は試みられていないのが現状である。

そこで本研究では、(1) 播磨国風土記に焦点をしばり、本文の正確な史料校訂をおこない、(2) その上で、風土記に書かれる説話・神話の中身にまで立ち入った逐条解釈、(3) さらに積極的に地域社会の中に足を踏み入れ、地元の歴史史料・民俗資料（聞き取り調査も含む）・埋蔵文化財・自然景観等を重んじた風土記研究をおこなうこととした。

2. 研究の目的

徹底的な史料校訂と現地調査（フィールドワーク）を踏まえた『播磨国風土記』の逐条分析をおこなうことにより、古代の地域社会の構造について、その当時の村落生活や信仰のあり方、他地域との交流実態の解明にまで踏み込んで復元することを目的とした。

3. 研究の方法

具体的な研究フィールドの場として、研究グループがある程度の実績をつんできた揖保川流域の2郡、すなわち揖保郡と宍粟郡を選定した。研究では、まずこの2郡に関する史料校訂をおこない、原文記述の復元を試みた。それと並行して、これらの地域の現地調査やGIS等も利用した地形復元分析等をおこなった。これらの作業を通じて、古代地域社会の景観の復元、および信仰・祭祀・儀礼を中心とする地域生活史や共同体像の復元を視野にいれた報告書（逐条解説書）の完成をめざすこととした。

4. 研究成果

(1) 『播磨国風土記』所載の地名の新しい現地比定と景観復元

3年の期間中、主に播磨国でもっとも「大郡」である揖保郡の各条を現地調査をおこない、それにより従来の通説的理解（日本古典文学大系『風土記』、新編日本古典文学全集『風土記』など）と異なる新知見を獲得できた。

これについては、それぞれの比定地の現地調査を、科研チーム単独ではなく、たつの市教育委員会の岸本道昭氏や義則敏彦氏など、地元市町の文化財担当職員や地域史研究家の協力のもとに実施できたことが大きい。

その成果については、後述の研究成果図書の1つ、『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』第2部の岸本道昭「粒丘と揖保里の再検討」、第3部の「播磨国風土記揖保郡条 註論」において公表した。これら成果は、従来の研究水準をかなり引き上げるものとして評価される。

(2) 国文学的研究の成果の吸収と課題の明確化

伝本が三条西家本のみである『播磨国風土記』においては、「諸註釈書が本文の難解箇所をどのように校訂してきたかを『校訂』することが重要」という国文学研究者の指摘を受けとめ、校訂をめぐる問題整理をおこない、『播磨国風土記』特有の問題点を明らかにできた。それとともに現地フィールドワークの成果、地域社会の構造を重層性・階層性等を重んじた視点で分析することにより、難解な底本部分の史料解明にもかなり接近できることが明らかになった。この研究成果については、研究成果図書の1つ、『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』第2部の高橋明裕「『播磨国風土記』の説話理解と古代の地域社会 —風土記の文学研究の成果と古代史研究—」において公表した。

これにより従来、個々別々におこなわれてきた国文学的研究と歴史学的研究との溝が埋まり、両者間の対話・交流がかなり進むことになると思われる。

(3) 地名起源説話に引用される神話・伝承にもとづく民間儀礼や祭祀分析への接近

古代の神話は、単なる机上の製作物ではなく、一定の「実践」との関わり、すなわち当時の祭祀や儀式との関連性をもつといわれる。本研究ではこの説にもとづき、風土記の地名にみえる地方神話の断片、あるいは歌垣民謡などを素材にしつつ、古代播磨の地域社会における共同祭祀や共同体結集のあり方、さらにはや族長層による支配儀礼の分析をすすめた。それにより近年停滞的であった古代村落論や共同体研究の中身のある程度豊かにすることができた。これにもとづく研究成果については、研究成果図書の『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』第2部の坂江渉「古代の地域社会と農民結合 —風土記・歌垣歌謡研究からみえてくるもの—」において公表した。

(4) 地名起源説話にもとづく古代播磨政治史へのアプローチ

研究を通じて、『播磨国風土記』の地名起源説話に断片的にみえる氏族伝承が、大化前代の古代播磨の政治構造や王権による播磨の政治的編成、あるいは他地域との交流内容を解明する素材となり得ることが明らかになった。これにもとづく研究成果が、研究成果図書『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』第2部の中林隆之「石作氏の配置とその前提」である。

(5) 地域連携の成果にもとづく新しい文字資料の「発見」

科研チームが連携する地元自治体職員からの情報提供より、山口県小郡文化資料館蔵の「刻書石」について調査研究をすすめ、その

結果、同石が『播磨国風土記』に載せられる地名を含む古代の文字資料であることを解明できた。この研究成果については、研究成果図書『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』第2部の古市晃「山口県山口市出土の古代石文 ―いわゆる秦益人刻書石について―」などにおいて公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. 古市晃、「山口県山口市出土の古代石文 ―いわゆる秦益人刻書石について―」、『LINK』(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報) 2号、査読あり、7頁、2010年8月(刊行予定、掲載決定済み)
2. 中林隆之、「「貸米」・「貸食米」 簡をめぐる予備的考察」、『長沙呉簡研究報告』2008年度刊、査読なし、pp. 61-65、2009年3月
3. 高橋明裕、「尼崎の古代史像」、『尼崎文化協会創立60周年記念誌』(尼崎文化協会)、査読なし、pp. 26-29、2008年7月
4. 松下正和、「〈外部〉から見た但馬・〈外部〉にある但馬―古代の播但交通と飾磨・越部ミヤケ―」、『但馬史研究』31号、査読なし、pp. 1-22、2008年3月
5. 坂江涉、「風土記の時代の河合地区」、小野市立好古館・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『特別展図録・河合地区の古代・中世遺跡と赤松氏』(小野市立好古館刊)、査読なし、pp. 9-11、2007年10月

[学会発表] (計4件)

1. 坂江涉、「播磨国風土記研究の成果と課題」、日本史研究会古代史部会、2010年3月29日、京都市
2. 高橋明裕、「古代播磨の地域社会と風土記研究 ―揖保郡条の地名起源伝承と現地調査から―」、日本史研究会古代史部会、2010年3月29日、京都市
3. 毛利憲一、「8世紀中期の地方財政策」、日本史研究会古代史部会、2009年1月26日、京都市
4. 古市晃、「古代地域社会論の動向」、大阪歴史学会前近代史部会、2008年4月14日、大阪市

[図書] (計7件)

1. 坂江涉、科研研究グループ (代表・坂江涉)、『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』、2010年、全102頁。神戸大学学術成果リポジトリ Kernel にて公開。

- <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/>
2. 毛利憲一・栄原永遠男・西山良平・吉川真司、塙書房、『律令国家史論集』、2010年、pp. 393-414 (分担執筆)
 3. 古市晃ほか、邑久町、『邑久町史 通史編』、2009年、pp. 121-195 (分担執筆)
 4. 古市晃、塙書房、『日本古代王権の支配論理』、2009年、全357頁
 5. 高橋明裕ほか、尼崎文化協会、『尼崎文化協会創立60周年記念誌』、2008年、pp. 26-29 (分担執筆)
 6. 坂江涉・松下正和・中林隆之・今津勝紀ほか、加西市、『加西市史 第1巻 本編 1 考古・古代・中世』、2008年、全632頁 (分担執筆)
 7. 坂江涉・森岡秀人ほか、本庄村史編纂委員会、『本庄村史 歴史編 ―神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ』、2008年、全862頁 (分担執筆)

[その他]

□ホームページ

調査研究の動きや研究成果の概要を、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターHPの「地域連携研究」欄に掲載予定。
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c>

□調査研究をめぐる新聞報道

1. 2007年5月18日付『神戸新聞』において、科研チームの唐荷島調査について、「室津沖の無人島調査/播磨国風土記もとに/古代社会を検証へ/神大講師ら」などと報道
2. 2007年7月10日付『神戸新聞』において、科研チームの上島調査について、「播磨国風土記を实地研究/調査チームが家島・上島を探索/『神像』に似た巨石を確認」などと報道。
3. 山口県小郡文化資料館蔵の「秦益人刻書石」(仮称)の調査研究については、その結果を2009年2月24日(神戸市)、2月26日(山口市)の両日、記者発表の形で公表。発表後の新聞各紙で大きく取り上げられ、毎日新聞の2009年2月27日(金)朝刊では一面掲載され、石板の写真ともに「石板持って姫路→山口/奈良時代・初確認」などと報道された。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂江 涉 (SAKAE WATARU)

神戸大学・大学院人文学研究科・学術推進
研究員

研究者番号：00221995

(2) 研究分担者

中林 隆之 (NAKABAYASHI TAKAYUKI)

新潟大学・人文学部・准教授

研究者番号：30382011

古市 晃 (FURUICHI AKIRA)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：00344375

松下 正和 (MATSUSHITA MASAKAZU)
神戸大学・大学院人文学研究科・特命講師
研究者番号：70379329

毛利 憲一 (MOURI KENICHI)
平安女学院大学・国際観光学部・准教授
研究者番号：00425026

高橋 明裕 (TAKAHASHI AKIHIRO)
天理大学・国際文化学部・非常勤講師
研究者番号：90441419